

2017.8.4～5 「キッズ・プロ・ジュニア」

聖書が教える「光」の概念



日本神の教会連盟・国内宣教委員会

次世代育成プロジェクト

やみの中から呼び出された光

【聖書箇所】創世記 1 章 1～3 節、Ⅱコリント 4 章 6 節

ベレーシート

●2017年の「キッズ・プロ・ジュニア」では、聖書にある「光」の意味について学びます。この「光」は目に見えない「光」ですが、聖書を理解する上でなくてはならないとても大切なものです。ところで、「光」という言葉を聞いてすぐに思い起こす聖書の箇所(聖句)は何でしょうか。いくつか有名な箇所を挙げてみましょう。以下は、新約聖書にある「光」についての記述です。

- ①「わたしは、世の光です。」(ヨハネの福音書 8:12, 9:5)
 - ②「あなたがたは、世界の光です。」(マタイ 5:14)
 - ③「光はやみの中に輝いている。やもしこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:5)
 - ④「すべての人を照らすまことの光が世に来ようとしていた。」(ヨハネ 1:9)
 - ⑤「・・・ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼(サウロ)を巡り照らした。」(使徒 9:)
 - ⑥「以前は暗やみでしたが、今は、主にあつて、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(エペソ 5:8)
 - ⑦「神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。」(Ⅰヨハネ 1:5)
 - ⑧「すべての良い贈り物・・・は上から来るのであつて、光を造られた父から下るのです。」(ヤコブ 1:17)
- 新共同訳「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。」(ヤコブ 1:17)

●上記のように聖句をいくつか並べてみましたが、実はこれだけで聖書が意味する「光」の概念を説明することはできません。「世の光」とはどういうことか。「天からの光」とは・・、「光の子ども」とはどういうことか、「神が光である」と語られているにもかかわらず、それがどういうことか。何となく分かるようで分からない、これが「光」のもっている特質です。なぜ分からないのか一言でいうならば、神の「光」は目に見えないからです。それゆえ人はこの光が理解できず、そのために拒絶する(憎む)のです。

●ところで、「光」を表わすヘブル語は「オール」(אור)、新約のギリシア語では「フォース」(φῶς)です。実は、ヘブル語の「オール」という三つの文字の中に、「光」とはどういうものを示すメッセージが語られているのですが、それは光の意味の答えが出てからお話することにしたいと思います。

●そこで第一回目の学びは、この「光」に照らされた一人の人物サウロ(後の使徒パウロ)を取り上げ、彼がこの「光」をどのように解釈し、理解したのかを取り上げてみたいと思います。これを知るためには、パウロの回心の出来事と、彼が諸教会に書き送った手紙の中から見出さなくてはなりません。そのプロセスとして、使徒の働きで三度も記されているパウロの回心の記事を最初に取り上げ、その「光」にふれた彼がどのように変えられたのか。その「光」を彼がどのように理解したのか、という点を取り上げたいと思います。

1. パウロ(サウロ)を照らした「天からの光」

●使徒の働きに記されているパウロの回心の記事はそれぞれ微妙に異なっていますが、三回(9:1～19、22:3～21、26:9～18)も記されています。聖書には「三」という数が驚くほど多く使われています。「三度」「三日目」「三日間」など、また今回のように「三」という直接的な数として記されていなくても、「あかし」の記事が三回も使徒の働きの中に記されているのは、「神による完全な取り扱いの確証」(神の確証としての「三」)を意味しています。パウロは自分に対する神の恵みのあかしとして、いつでも、どこでも、自分に起こった出来事のあかしをしたはずで、パウロは他の使徒たちと異なり、歴史上のイエシュアとともに過ごした事はありません。しかし、この「天からの光」の経験こそが、人に自分の使徒性を主張できた唯一の出来事なのです(ガラテヤ 1:1)。

●サウロ(=「シャーウール」 **שאול** は「神を熱心に尋ね求める者」の意)、つまり、後の使徒パウロ(=「パウロス」 **Παυλος** はラテン語で「小さい」の意、実際に彼は背が低かったようです)は、ダマスコへの途上で、突然、「天からの光」に照らされました。彼は地に倒れ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声をヘブル語で聞いたのでした。「主よ。あなたはどなたですか。」と尋ねると、「わたしはあなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずで。」という主の声を聞いたのです。彼は「天からの光」によって目が見えなくなり、三日の間、暗闇の中で、また一切の飲食も絶って、彼は自分に起こった出来事を考え巡らしていたことと思います。そして三日目に、主から遣わされたアナニヤというクリスチャンが訪ねてきて、サウロの頭に手をおいて祈った時、彼の目からうろこのようなものが落ちて、目が見えるようになったのでした。

●「目が見えるようになった」というのは、単に肉体的な視力が回復したことだけを意味しません。彼が迫害してきたイエシュアこそ、神が約束されたキリスト(メシア)であるということを論証できるほどに、彼の霊の目が開かれたことを意味します。言い換えるなら、神のうちにある正しい知識によって、彼のうちにおいてすべてが整理し直されたことを意味します。たとえ三日間でも、それは私たちの何十年分に相当する経験であったかもしれません。驚くべきことは、その三日間の経験がダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせるほどであったということです。何が彼をそのように変えたのでしょうか。それは「**天からの光**」です。この「天からの光」が、神によってすでに定められている永遠のご計画を、彼のうちに理解させ、悟らせる「啓示の光」であったのです。

●サウロを照らした「天からの光」は「シャハイナ・グローリー」という特別な光で、文字通り、「太陽よりも明るく輝く光」でした。それを見たサウロと、彼に同伴した者たちはみな地に倒れました。しかし、その光によって目が見えなくなり、しかもその光の中から主の声を聞いたのはサウロただ一人だけでした。どんな声を彼は聞いたのでしょうか。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」(9:4)。これは彼が聞いた最初の部分で、その後も主の声は続いていました。「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」(使徒 26:14)と。その後も主の声は続いてパウロのこれから果たすべき使命が語られます。

パウロが経験した「天からの光」はまさに「天からの啓示」だったのです。「啓示」とは神のご計画が特別に開示され、示されることです。このことは、パウロだけでなく、私たち一人ひとりにも必要です。つまり、「目からうろこ」(が落ちる)という霊的経験です。

●後に、使徒パウロはこの「天からの光」を、「キリストの栄光にかかわる福音の光」だとし、『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださった」と述べています(Ⅱコリント4:4, 6)。「福音の光」と「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識」とは同じ意味です。つまり「天からの光」なしに、福音を正しく理解することはできないということです。ですから、「天からの光」は「人に悟りを与えて人を輝かす光」であり、神との生きたかかわりをもたらす「いのちの光」とも言えるのです(ヨハネ1:4)。

2. パウロが理解した「光」の概念

●ここで注目したいことは、Ⅱコリント書4章6節は、パウロが創世記1章3節のことばを解釈したことばだと言うことです。つまり、創世記1章3節で、「神が、『光よ。あれ。』(新改訳第二版)、「光があれ。」(新改訳第三版)、「光あれ。」(新共同訳)とあるのを、『**光が、やみの中から輝き出よ。**』と言われた神」と表現しているということです。パウロが聖書のみことばを引用するときは決まって、当時、すでにギリシア語で翻訳されていた七十人訳(LXX)聖書からです。しかし彼はユダヤ教のすぐれたラビでもあったわけですから、当然、ヘブル語で書かれたものも暗記していたはずで、そのヘブル語で書かれた創世記1章3節は、以下のように記されています(ヘブル語は右から、「ヴァッヨーム・エローヒム・イエヒー・オール・ヴァイエヒー・オール」と読みます)。

オール ヴァイエヒー オール イエヒー エローヒム ヴァッヨーム
 וַיִּמְרָא אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי־אוֹר
 光があった すると 「光あれ」 神は 言われた そのとき

●新改訳聖書第二版の「光よ。あれ。」が、改訂3版では「光があれ。」となり、第二版の「すると**光ができた**」という表現が、改訂第三版では「すると**光があった**」と変更されています。つまり、「できた」が「あった」に改変されたのです。口語訳も新共同訳も「あった」と訳していますが、一体何が問題なのでしょう。ちなみに、NKJVではthere was、TEVはlight appeared とあり、「光が現われた」と訳しています。この箇所を、Ⅱコリント4章6節で、使徒パウロは「**やみの中から光が輝き出よ**」と訳しているのです。ということは、神はすでにあった光を、やみの中から呼び出していることになります。このことは、神がことばをもって命令したことによって、そのときはじめて光が創造されたのではないことを示しています。神が「光よ。あれ」と読んで、神が命じて最初に創造されたものは「光」であると考えている人が多くいます。しかし、そうではないのです。ここは、神の命令によって創造されたのではなく、すでにある光がやみの中から神に呼び出されているのです。文法的には動詞未完了形の3人称の指示形によって表されています。命令形ではありません。本来、神がすでにあらかじめ計画していたものが目に見える形となって「**現われるよ**

うに」というのが、未完了指示形が意味していることなのです。

●ちなみに、命令形が聖書ではじめて登場するのは、神が地の上に登場させたもの(者)に対してです。命令形には、命じる対象が不可欠です。ですから、神は地上や海や空に住む生き物に対して、「産めよ」「増えよ」「満ちよ」と命じ、同じく人に対しても、「産めよ」「増えよ」「満ちよ」と命じており、特に、人の場合はさらに「地を従わせよ」という命令を付け加えています。このように、神の「呼び出し」(未完了指示形)と被造物に対する「命令」(命令形)を含めた経緯全体を、神は「天と地を創造された」(1:1、2:1)と聖書は記しているのですが、微妙な違いを理解しましょう。

●少々専門的な説明をしてしまいましたが、神の「天と地の創造」は、神が「～するように」という「あらかじめ決めていた神のご計画に沿って成されているということ」です。こうした理解は、パウロがⅡコリントの4章6節で、パウロが創世記1章3節を解釈して、『光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神」と表現した箇所のみならず、パウロの他の手紙の中の随所に表れています。特に、エペソ書1章はまさにそうです。そこには「光」ということばがなくとも、それが他のことばによって表現されているのです。これを「同義的パラレリズム」と言います。これを「言い換え表現」とも言いますが、聖書を理解する上でとても大切な修辞法(表現方法)なのです。このことを理解することによって、聖書のみことばを、聖書のみことばによって解釈することができるようになるのです。

●そこで、このことを知るために、エペソ人への手紙の1章1～14節を取り上げてみたいと思います。この箇所には、聖書のいう「光」の意味が記されているのです。

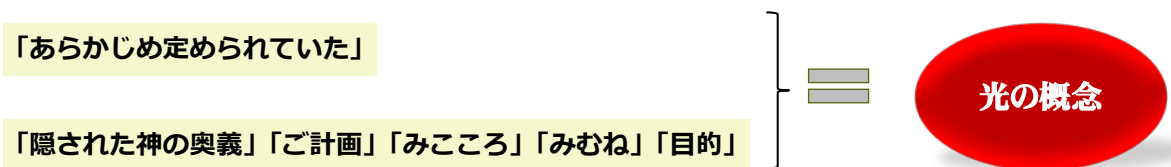
【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙1章1～14節

- ① +のある箇所は第3版で改訂された部分です。()内は私の説明です。
- ②この手紙にある「**聖徒たち**」「**私たち**」「**あなたがた**」とは、「教会」(=キリストの花嫁)と同義です。
- ③黄色のマーカーは、神の永遠のご計画と意志決定を表わす語彙で、「**みこころ**」「**みむね**」「**ご計画**」「**目的**」といった語彙が含まれます。

- 1 神の**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)による**キリスト・イエス**の使徒パウロから、**キリスト・イエス**にある**忠実なエペソの聖徒たち**へ。
- 2 **私たちの父なる神と主イエス・キリスト**から、**恵みと平安**が**あなたがたの上**にありますように。
- + 3 **私たちの主イエス・キリストの父なる神**が**ほめたたえられます**ように。神は**キリスト**にあって、**天にあるすべての霊的**祝福をもって**私たちを祝福**してくださいました。
- + 4 すなわち、神は**私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって**選び、**御前で聖く、傷のない者**にしようとされました。
- + 5 神は、**みむね**(「ユードキア」 $\epsilon\acute{\upsilon}\delta\omicron\kappa\iota\acute{\alpha}$)と**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)のままに、**私たちをイエス・キリストによってご自分の子**(=「養子」、しかし花嫁であれば父から見て子の立場にある)にしよう

- うと、愛をもってあらかじめ定めておられました(「プロオリゾー」 προορίζω)。
- +6 それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
- +7 この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- +8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、
- +9 **みこころ**の奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、この方において神があらかじめお立てになった(発案してくださった=「プロティセマイ」 προτίθεμαι)**みむね**(「ユードキア」 εὐδοκία)によることであり、
- +10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにおいて、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。
- +11 この方において私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。**みこころ**により**ご計画**(「プロセシス」 πρόθεσις)のままをみな行う方の**目的**(=意志「ブーレー」 βουλή)に従って、私たちはあらかじめこのように定められていた(「プロオリゾー」 προορίζω)のです。
- +12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。
- +13 この方においてあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。
- +14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐこと(=相続財産)の保証(=手付金)です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

●ここには重要なことばは数多くあります。その中で最も重要なのは「**あらかじめ定められていた**」(=**世界の基が置かれる前から**)というフレーズです。「あらかじめ定められていた」と訳された「プロオリゾー」(προορίζω)は新約聖書で6回(使徒4:28、ローマ8:29,30、Iコリント2:7、エペソ1:5,11)だけですが、当然ながら、すべて時制はアオリスト(過去)です。目を通しておくべき重要な箇所です。



●ところで何が「あらかじめ定められていたのか」と言えば、それは神の「みこころ」として、神の「みむね」として、神の「ご計画」として、神の「目的」として定められていた、神の「隠された奥義」としての事柄です。しかもその奥義は、神が御子キリストによって、キリストを通して、キリストのためになそうと定めている事柄です。これが「光」のことばで言い表わされているのです。エペソ書1章のテキストには「光」という語彙は一度も使われていませんが、そこには創世記1章3節の「光」について語っているのです。

●使徒パウロがエペソの教会に対して「神のご計画の全体を、余すところなく」知らせた(使徒 20:27)と
っています。いうその内容は、まさに創世記 1 章 3 節の「光」(אור)についての注解と言えるのです。

אור



- (1) א 「アーレフ」という文字は「力ある者」、「神」を意味します。
- (2) ׀ 「ヴァヴ」という文字は「釘」を意味します。つまり、あるものを固定します。
- (3) ׀ 「レーシュ」という文字は、「頭、考え、計画」を意味します。つまり、神の考えのことです。

●神が「呼び出された光」とは、神にはやりたいことがあるということです。「アーレフ」「ヴァヴ」「レーシュ」という三つの文字が意味することは、これまで学んできたことが要約されているのです。つまり、「光」を意味するヘブル語の「オール」とは、神がすでに定めておられた(固定された)ご計画、みこころ、みむね、目的のことなのです。

●使徒パウロはエペソの聖徒たちに「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(5 章 8 節)と語っています。ここでの「光の子ども」とは、「明るく、元気で、生き活きと」という意味ではありません。「光の子ども」とは、**やみの中から輝き出された光、すなわち、神の永遠のご計画(みこころ、みむね、目的)を悟った者のこと**なのです。それゆえ、私たちは主にある「光の子」であることを自覚し、その意味するところを深く悟り、それにふさわしく歩んで、パウロのように「光」についてあかしする(論証する)力が与えられることを意味しています。

●あなたは、神の永遠のご計画(みこころ、みむね、目的)を意味する「光」について関心があるでしょうか。もし、ないとしたら、それは神がしようとすることに無関心だということになり、あなたの考えることとするのは、すべて神との関係において「^{まとはず}的外れ」ということになります。この「^{まとはず}的外れ」のことを、聖書では、「罪」(=暗やみの中にいること、暗やみを愛すること)と言うのです。

光とやみを区別されることをよしとされる神

【聖書箇所】創世記 1 章 3～5 節、Ⅱコリント 6 章 14 節～7 章 1 節

ベレーシート

神が「光よ。あれ。」と言われたそのときにはじめて光が創造されたということではなく、光はもともと存在しており、天と地の創造の舞台で、神がその光に対して「やみの中から輝き出よ」と呼び出したということです。この「光」にふれた使徒パウロがそのように理解していた(Ⅱコリント 4:6)ことをお話しました。そして、最初に神によって呼び出された「光」の正体とは、**神が御子を通して、(世界の基が置かれる前から)「あらかじめ定められていた」神のご計画、神のみこころ、神の御旨、神の目的のことだということも** お話しました。実は、このことを理解するだけでも大変な悟りを得たことになるのです。というのは、この「光」(「オール」 אור)について正しく理解することは、本来、私たちの生まれながらの知恵では絶対に理解できないことだからです。

●詩篇 36 篇 9 節に「**私たちは光のうちに光を見る**」というフレーズがあります。「光のうちに」という訳は「光によって」とも訳せます。また、「見る」(「ラーアー」 רָאָה)という動詞も、「分かる、理解する、知る」とも訳せるのです。つまり、「**私たちは光によって、光を理解する**」ことができるということです。使徒パウロがダマスコ途上で、真昼に、「天からの光」に照らされたことで彼の目は塞がれ、三日目になって「目からうるこのようなもの」が落ちたことで視力が回復し、同時に、自分に照らされた「天からの光」が何であったのかを理解できたのです。パウロは「天からの光」によって、はじめて自分が「やみの中にいた」ことを知りました。それまでの彼は、自分がやみの中にいることに全く気づかずにいたのです。

●詩篇 119 篇 130 節には、「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえない者に悟りを与えます。」とあります。このみことばによれば、みことばの戸が開かれることと、「悟り」が与えられることは密接な関係があるようです。「悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい」(詩篇 49:20)というのが聖書の立場です。「悟り」は、口語訳では「知恵」、新共同訳では「理解」、英語では understanding と訳されます。「**私たちは光によって、光を理解する**」とはどういうことかを、パウロを観察することで間接的にそれがどういうことかを知ることができます。しかし、それは自分が理解することとは別です。私たちも一人ひとりが直接的に天からの「光」に照らされなければ、「光」を理解することはできないということです。「光」を理解するとは、神の奥義を理解することでもあります。そのようなことを前回でお話しました。

1. 「光」と「やみ」との区別

●「光がやみの中から輝くように」と呼び出された神は、「光」と「やみ」とを明確に**区別**することを「よしとされた」ということが創世記 1 章で強調されています。神はなにゆえに「よしとされた」のでしょうか。

そのことについて今回取り上げてみたいと思います。

●光が神によって呼び出される前に、やみはすでに存在していました。創世記 1 章 2 節を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】創世記 1 章 1～5 節

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日(「エハッド」 אֶחָד)。

●4 節を見ると、「神は光とやみとを区別された。」とあります。「光」のことをヘブル語で「オール」(אור)と言います。また「やみ」は「ホーシェフ」(חֹשֶׁךְ)です。「オール」と「ホーシェフ」を覚えましょう。神は、「やみ」の存在を認めながらも、「やみ」とは本質的に異なる「光」を登場させ、それを良しとされ、「やみ」と区別されたのです。「区別した」と訳されたヘブル語は「バーダル」(בָּדַל)で、「分ける、分離する」という意味があります。

●そもそも、なぜ「やみ」がすでに存在しているのかという点については、今回は触れないことにいたします。今回は、光とやみとを「分けられた、区別された」というところに注目したいと思います。この区別に当たって、神は「光を昼と名づけ」、そして「やみを夜と名づけられ」ました。この「名づける」という行為は、主権と支配を意味します。また、「あなたにとっては、やみも暗くなく、夜は昼のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。」(詩篇 139:12)とあるように、神は光もやみも支配される方です。それゆえ、誰一人として神の支配から逃れることはできないことを示唆しています。

●ところで、光とやみが昼と夜と名づけられましたが、光もやみも私たちの目には見えない現実です。この見えない現実の写しが、第四日目に「二つの大きな光る物」として創造されます。

【新改訳改訂第3版】創世記 1 章 14～19 節

14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。

15 また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。

16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。

17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、

18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。

19 夕があり、朝があった。第四日。

●ここに登場する「二つの光る物」とは光源としての光としての「太陽」と「月」のことだと理解できます。光源としての光る物によって、「昼と夜を区別せよ」とあります。これは第一日の、目に見えない「光」と「やみ」が存在していることの写し(コピー)として造られたと考えられます。目に見えない「光」と「やみ」を、目に見える「昼」と「夜」で示すために、神が創造した存在があるということを物語っています。これを神学的な言葉で表現すると「一般啓示」と言います。

●「一般啓示」という言葉と対応するのが、「特別啓示」(御子イエシュア)です。「一般啓示」とは自然や歴史、また人間の存在(男と女)という形を通して現わされている神の啓示です。たとえば、自然におけるすべての存在は、他とのかかわりをもたないで存在しているものは何一つありません。自然の中にあるすべてがなんらかのかかわりをもって存在しています。樹木一本にしても然りです。太陽の光と熱、大地、水、栄養を摂ることができるように働いている菌根菌の存在があつてはじめて樹木として生きることができるのです。一般啓示としてのこのいのちのつながりはすべて目に見えない神の世界を表わす写しです。しかしこのことも、神の「光」なしには理解することができません。私たちが自然の中にある驚くべきいのちの仕組みをたとえ知ったとしても、それが神を知ることにつながるのはそのためです。そこで神は「特別啓示」としてご自身の御子をこの世にお遣わしになり、直接的に神の「光」をあかししようとされたのです。

●実は、ヘブル文字は神の概念を表わす聖なる言語なのです。ひとつひとつの文字の中に神のご計画を啓示するメッセージが実は込められています。

- (1) 最初の「アーレフ」という文字は、力ある存在、神を表わします。
- (2) 次の「ヴァヴ」という文字は、吊り下ろす(天から下る)、固定する、定めるという意味があります。
- (3) 最後の「レーシュ」という文字は、頭、思考、神の計画やみこころを意味します。



●つまり、ヘブル語の光「オール」に込められた意味は、神がご自身のご計画を定められたことを意味します。それが聖書が意味する「光」の概念です。目に見える光源の光とは異なるものです。

●「特別啓示」である神の御子イエシュアはこの世を照らす「光」として遣わされました。イエシュアが語り、そして彼がなしたすべての行為(奇蹟)は、決して行き当たりばったりの事柄ではなく、そのすべてが神の「あらかじめ定められた」ご計画と密接につながっているのです。このつながりを自然においてあかししているのが「一般啓示」です。つまり、目に見える形で啓示されているのですが、「光」を持たない者にはそれを理解することができないのです。天からの「光」に照らされることによってはじめて神の「あらかじめ定められておられる事柄」に導かれるということです。その事柄のことを、聖書は「奥義」ということばで言い表しています。繰り返しになりますが、神が「あらかじめ定められておられる事柄」とは、神のご計画であり、神のみこころ、神の御旨、神の目的のことであり、それは決してぶれることなく、神の主権のうちに実現される事柄です。その事柄がやみの世界に置かれることを神は良しとされたのです。ただし、永遠にはありません。やみが永遠に駆逐される時までです。新しい天と新しい地にはやみがありません。

- 使徒パウロは主から与えられた使命を以下のように述べています。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 26章 16～18節

- 16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。
- 17 わたしは、この民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。
- 18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。』

2. 区別された「光」と「やみ」を表わすさまざまな表象

- 使徒パウロは「光」の現実と「暗やみ」の現実を表わすために、さまざまな表象を用いています。その最初の表象は、「**神の知恵**」と「**この世の知恵**」です。同じ「知恵」(「ソフィア」σοφία)ということばを用いていたとしても、区別されるべき知恵があるということです。

(1) 神の知恵とこの世の知恵の区別

- コリントの教会は、「私は、〇〇〇〇につく」と言って分派をつくり、分裂を招いていた教会でした。その教会に対してパウロは、自分が神から遣わされたのは、(分派をもたらすような)バプテスマを授けるためではなく、福音を伝えるためであるとし、この福音を伝えるに当たって、「この世の知恵によって」はしないと断言しています。パウロが「知恵」ということばを使うときに、「**神の知恵**」と「**人間の知恵**」を明確に区別して語っています。言い換えの名人であるパウロはそれぞれの「知恵」をいろいろな言葉で言い換えています。

- ①【神の知恵】(Iコリント 1:21)・・・「隠された奥義としての神の知恵」(Iコリント 2:7)
- ②【人間の知恵】(Iコリント 2:5)・・・「ことばの知恵」(同、1:17)、「この世の知恵」(1:20)、「自分の知恵」(1:21)、「すぐれたことば」「すぐれた知恵」(2:1)、「説得力のある知恵のことば」(2:4)

- 「すぐれたことば」「すぐれた知恵」(2:1)、「説得力のある知恵のことば」(2:4)—それは結構ではないかと思うかもしれませんが、それらは人間的に見るならばばらしい能力のように思います。しかしそれはすべて「人間の知恵」であるがゆえに、パウロはそのような知恵によって「福音」を語ることはしないとしましたので。なぜなら、「神の知恵」は「この世の知恵」によっては悟ることができないからです。もし神の知恵をもしこの世の支配者たちが悟っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったはずだとパウロは述べています。また、「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」(1:21)と、いわば究め付けとも言えることを述べています。

神の知恵は神のすべてのことを知る御霊の助けによってのみ理解できるのです。この御霊は神からの賜物です。この「賜物」について話すのも、人間の知恵によることばを用いず、御霊に教えられたことばを用いま

す。つまり、「御霊のことばをもって御霊のことを解く」ということです(2:13)。これは詩篇 36 篇 9 節にある「私たちは光のうちに(=光によって)光を見る」というフレーズと同じことを言っているのです。

●パウロは、徹頭徹尾、神を中心とした概念で理解し、そして語るという生き方を貫いています。人間的な概念、人間の経験、価値観、評価によって理解するのではなく、神からの光で、神からの賜物である御霊によって神の世界を知る世界です。御霊を与えられている人は、神のすべてのことをわかまえることができますが、自分の知恵によってはだれもわかまえることができないのです。

●なつかしの CM に、「ダバダー・ダー・ダー・ダバダー」というメロディがありました。「違いの分かる男、ゴールドブレンド」。「分かる者には分かる」、「違いの分かる通の者にはこのコーヒーブレン드의良さが分かる」ということですが、違いが分かるというのはあくまでもこの世におけるところの味です。しかし主にある私たちは、「光の子ども」として、「光」と「やみ」との違い、「神のもの」と「この世のもの」との違いが分かって、それを区別できなければなりません。なぜなら、それは水と油のように、決して混ざり合うことのできないものだからです。サラダにかけるドレッシングのように、混ざり合うと勘違いしてはならないのです。違いが分かる者になるには、以下、パウロが語っている事柄の区別を正しく理解しなければなりません。

(2) つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけない

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント 6 章 14～18 節、7 章 1 節

14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。

光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。

「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。

そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

7:1 愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

●「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。」の「くびき」というのは結婚のことです。全く違った価値観をもった男女がいっしょに歩くことには、無理があるのです。

①「正義」と「不法」・・・・・・そこには、何の**つながり**もない。

②「光」と「暗やみ」・・・・・・そこには、何の**交わり**もない。

③「キリスト」と「ベリアル」(※)・・・・・・そこには、何の**調和**もない。

④「信者」と「不信者」・・・・・・そこには、何の**かかわり**もない。

⑤「神の宮」と「偶像」・・・・・・・・・・そこには、何の**一致**もない。

※「ベリアル」とは、ヘブル語の「ベリツヤアル」(בְּרִיאַל)に相当し、「無い」を意味する「ベリー」(בְּרִי)と「価値、有用」を意味する「ヤアル」(יָאַר)を合成した語彙で、「無益な者」「よこしまな者」と訳されます。新約時代には定冠詞を伴って人格的な意味を持ち、サタンに対する名称とされています。

●ここには明確に区別されていることがあります。この区別は神が定められたものです。それをドレッシングのように混ぜ合わせて良しとしてはならない事柄なのです。なぜ、一見厳しいと思われるような区別がなされるのでしょうか。それは神と人とが共に住み、歩むためです。ですから区別が必要なのです。旧約のトラーの中に食べて良い物と食べてはならない物の区別があるのは、神の民に「神のもの」と「この世のもの」とを一緒にしてはならないということを教える型であったのです。他の理由は考えられません。

●使徒パウロが述べているように、明確に区別すべきものを区別することを怠ると、苦い実を食べることになります。もし私たちが神と共に住み、神と共に歩もうと願うならば、区別する務めを、分離すべき務めを、神の知恵によってなさなければならぬのです。なぜなら、私たちは「光の子ども」とされたのですから。

見えないものにこそ、目を留める

【聖書箇所】Ⅱコリント4章18節、5章16~17節、18~21節、ヘブル11章1節

ベレーシート

●聖書が教える「光」とは何か、その第3回目です。創世記1章3節の「神は仰せられた。『光があれ。』すると光があった。」という「光」は、私たちの目には見えない「光」です。なぜなら、この「光」は光源としての光ではなく、神が御子を通して、(世界の基が置かれる前から)「あらかじめ定められていた」神ご自身の緻密なご計画、深淵なみこころ、そして神の御旨と目的を含んだ「測り知れない重い事柄」を包含した「光」だからです。しかもこの光は「人の心に思い浮かんだことのないもの」であり、神が天と地を創造するにあたって、やみの中から呼び出されたのです。

●どんな言葉にも類義語があるように、「光」のような根源的な事柄を表わす言葉にも類義語が存在します(とはいえ、私たちはそれが類義語であるということを知らずにいる場合が多いのですが)。前回は、「光」(「オール」אור)の類義語として考えられるものとして「知恵」(「ホフマー」חכמה)を取り上げました。「知恵」といっても、「この世の知恵」ではなく、「**神の知恵**」です。「この世の知恵」によっては神を知ることはできません。同じ「知恵」(「ソフィア」σοφία)という言葉を使っていたとしても、「神の知恵」と「この世の知恵」は全く異質なものであり、区別すべきものなのです。それらを混ぜ合わせるなどできません。「この世の知恵」によっては「神の知恵」を悟ることができないという事実、この事実を知ること、実は神の知恵なのです。もしこの世の支配者たちが「神の知恵」を悟っていたなら、決してイエシュアを十字架につけはしなかったはずだとパウロは述べています(Ⅰコリント2:8)。「この世の知恵」は「やみの中の知恵」であり、たとえその知恵がどんなに賢く、優れていたとしても、その知恵によっては「光」(「オール」אור)を悟ることは絶対に不可能なのです。

●「光」についてのさらなる類義語として、「**栄光**」という語彙があります。神の測り知れない「重い事柄」のことを、聖書では「**栄光**」(ヘブル語では「カーヴォード」כבוד、ギリシア語では「ドクサ」δόξα)という言葉で表しています。

●「**光**」-「**知恵**」-「**栄光**」にはそれぞれ共通しているものがあります。その共通項とは何でしょうか。その一つは、いずれも「**目には見えない**」ということです。そしてもう一つの共通項は、いずれも天地創造の前からあったということです。「**栄光**」の場合、ヨハネの福音書17章にある十字架の前の御父に対するイエシュアの祈りの中に、「今は、父よ。みそばで、わたしを**栄光**で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていました**あの栄光**で輝かせてください。」(17:5)とあります。「**あの栄光**」とはいったい何を意味するのでしょうか。それをあえてことばにするならば、御父と御子と



の間にある「永遠の信頼」ということにならないでしょうか。イエシュアは地上で御父の栄光を現わされましたが、その最後の十字架の出来事において「あの栄光で輝かせる」とは、すなわち、天地創造の前からあった「永遠の信頼が貫かれること」を意味するのではないかと思います。この永遠の信頼によって神のご計画やみどころが実現するのです。

1. 目に見えないものが、目に見えるものを支えているという事実(真理)

●使徒パウロは言いました。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、目に見えないものはいつまでも続くからです。」(Ⅱコリント 4:18)。これはすごい発言です。私たちの多くは、「目に見えるものにこそ、目を留めやすい」者です。ですから、「神がいるなら、神を見せてみる」とか、「オレは見えるものしか信じない」「見えないものは信じられない」と言った発言を耳にします。しかし、目に見えないものはこの世界に数多くあります。今日、ノーベル物理学賞をもらっている人たちの研究はほとんどが目に見えない分野のもので、すなわち、「オレは見えるものしか信じられない」と言う人は、科学も信じられないという偏狭な人(高慢な人)ということになります。ただし、科学のいう目に見えないものと、聖書のいう目に見えないものとは質を全く異にしています。

●「目を留める」と訳されている動詞「スコペオー」(σκοπέω)は、「～に目を留める、注視する、注目する、見張る、気をつける」という意味があります。「見えないもの」とは、「並はずれた永遠の栄光の重み」をもたらす事柄です(Ⅱコリント 4:17、「新改訳では「測り知れない、重い永遠の栄光」となっています)。そのことに「目を留める」人は、パウロのいう「成熟した人(成人した人)」を意味します。私たちはそのような人になることを目指さなければなりません。いつまでも「乳飲み子」であるなら、聖書は単なる「難しい」で終わってしまいます。キリストを信じる者には、何と知恵と啓示の御霊が神の賜物(プレゼント)として与えられています。キリスト者は御霊の助けによって成長し、大人になるように期待されています。その成長のためには、私たちが日々ご飯を食べると同じように、日々神のみことばを摂取する必要があります。なぜなら、御霊はみことばをもって私たちを成長させてくださるからです。聖書を読まなければ、幼子のままです。しかも、「駄々をこねるわがままな幼児」の状態です。イエシュアは言われました。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」と(マタイ 4:4)。御霊と神のみことばによって、私たちは神の子どもとして成長させられ、「見えるものではなく、見えないものにこそ目を留める」ようになるのです。それは信仰が成長することと関係があります。

2. 信仰とは、目に見えないものを確信させる

●光がやみの中に輝く目的は、すでに定められている神のご計画が実現することを意味します。パウロが「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。」と言ったのは、彼が常に「見えないもの」が神によって実現することを確信していたからです。このパウロが「だれでもキリストのうちにある

なら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ。すべてが新しくなりました。」ということばを記しています(Ⅱコリント 5:17)。このことばが意味することはどういうことでしょうか。クリスチャンになった人が自分の姿を見て、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者だ」と言うけれども、信じる前と比べて少しも変わっていない。それに「見よ。すべてが新しくなりました。」と言うけど、そんな実感がまったくないと不平を言っていました。そんな思いを持ったことはありませんか。

●「すべてが新しくなりました」という部分を、キリストを信じて教会に行くようになってから、性格が前に比べて少し良くなったように思うといったレベルの話だとしたら、とんでもない誤解です。パウロがここで語っていることは、ものの見方が全く変わってしまったことではじめて知った事柄を意味しているのです。

パウロがⅡコリント 5 章 17 節で語っていることばのコンテキストを見てみましょう。この 17 節の前の箇所、パウロは「私は今後、人間的な標準で人を知らうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」(Ⅱコリント 5:16)と語っています。「人」だけでなく、「キリスト」のことも、です。つまり、人の世界のことも、神の世界のことも、すべて人間的な標準で知らうとはしないという宣言です。「人間的な標準で」とは「目に見える基準で」ということであり、この表現は「この世の知恵」をも含んでいます。考え方の出発点、つまり考え方の視座を人間的なものから神に移すことを意味しています。そうした視座からでないと、17 節の「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ。すべてが新しくなりました。」というみことばは理解できないはずで

●パウロは 4 章 18 節で「私たちは、目に見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」と述べたあとに、5 章ではこう述べています。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。・・・確かに、私たちは見えるところによってではなく、信仰によって歩んでいます。」(Ⅱコリント 5:1～7)。このあとに先ほどの、人間的な標準で知らうとしないという言葉が来て(16 節)、17 節で「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」という**信仰のことば**を語っているのです。にもかかわらず、この信仰のことばを人間的な標準で理解しようとする、自分は何も新しくなっていない、新しく感じられないということになってしまうのです。人間的な標準(人間的視点)ではなく、神の標準(神の視点)で考えるということは、神の永遠のご計画の視点から見て、そして、考えるということになります。

●「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。」とはどういうことでしょうか。「神の下さる建物に住む」とか、「人の手によらない、天にある永遠の家に住む」とか、「天から与えられる住まいを着る」とは一体どういうこ

とでしょうか。これらの「建物」「家」に住むためには、一つの条件があります。その条件とは、「復活のからだ」を私たちがもっていなければならないということです。イエシュアの上で流された血潮は、私たちのすべての罪が赦されるためのものでした。しかしイエシュアが死からよみがえられたのは、私たちによみがえりのからだを与えて、神の家に住ませるためです。イエシュアの復活はその「初穂」です。「初穂」というのは、やがて多くの収穫があることを予想させます。キリストの復活が初穂であるということは、キリストを信じる者もやがてキリストと同じように復活のからだを与えられることを意味しています。その新しい復活のからだを与えられることを、パウロは「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ。すべてが新しくなりました。」と述べているのです。これはやがて教会が携挙される時に起こります

●このようなことは、目に見えない信仰の事柄です。ですから、神のご計画に対する信仰がなければ、Ⅱコリント 5:17 節のことばは理解できませんし、またそこに確信と希望を置くことができないのです。すべては神の知恵をこの世の知恵で理解しようとするところに問題があります。サラダにかけるドレッシングはよく振れば混ざったように見えます。同様に、神の知恵とこの世の知恵も一見混ぜ合わさるように思いがちですが、時間が経てば再び油と水のように分離してしまうのです。これが神の視点で考えないキリスト者の姿であり、混乱を引き起こす要因なのです。

3. 信仰は神をことのほか喜ばせる

●神の視点で永遠の神の事柄を知るためには、信仰が不可欠です。ヘブル人への手紙 11 章 1 節はこのことをよく表わしています。この節は同義的パラレリズム(並行法)で書かれています。つまり、最初の行にある事柄が、次行では別の言葉で言い換えられているということです。1 節のみことばを見てみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】

信仰は望んでいる事がらを保証し、
目に見えないものを確信させるものです。

【新共同訳】

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、
見えない事実を確認することです。

●ここで、最初の行の「望んでいる事柄」とは、私たちが「望んでいる事柄」のことではありません。それは次の行にあるように「目に見えないもの」のことです。つまり、神の永遠の事柄であり、神のご計画にある秘密、奥義のことです。つまり、神のご計画の最終目標について確認すること、確認させるもの、それが信仰なのだと言義されています。ヘブル書 11 章には、そのような信仰によって生きた人々が挙げられています。その中のひとりにアブラハムがいます。彼は「信仰によって義とされた」最初の人です。「義」とは神が最も喜ばれるかわかりを意味します。神は行いではなく、信じることを何よりも、ことのほか喜ばれるのです。そして神と人の心がひとつになるのです。これが「義」という意味です。

【新改訳改訂第3版】ヘブル書 11章 8~10節

- 8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
- 9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。
- 10 **彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。**その都を設計し建設されたのは神です。

●特に、注目すべき点は太字の部分です。「彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた」とあります。この「都」は、神のご計画においては「エルサレム」以外にはありません。「エルサレム」こそ、神のヴィジョンの中心地であるからです。そこに彼は自分の相続財産を受け取るべき地として確信したのです。その確信は、イサクにも、ヤコブ(イスラエル)にも受け継がれたのです。少なくともアブラハムから三代目までが記されていますが、その信仰は神の恵みによって受け継がれてゆくのです。都は彼らに対する神から受け継ぐべき信仰の遺産だったのです。なんとスケールの大きい信仰かと思いますが、私たちに与えられている福音は、すべて神のご計画が完成されるときに完全に賦与されます。そのことを思う時、私たちは永遠の神のご計画とそのみこころとその目的を知って、そのことを信じる信仰が不可欠です。なぜなら、信仰とは目に見えない永遠の神のご計画の実現を確信させるものだからです。それゆえ、私たちはパウロのように、「見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、目に見えないものはいつまでも続くからです。」(Ⅱコリント 4:18)と言わなければなりません。

●「見えないものにこそ目を留める」ことで、神のご計画のみこころと目的が見えてきます。パウロはそこから神の福音、ならびに神の和解の務めを果たそうとしました。神のご計画の最終目的は、パウロが述べているように、「いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方(=キリスト)にあって、**一つに集められること**」(エペソ 1:10)です。これを別のことばでは「**御国を受け継ぐ**」と表現されます。